
雪風の使い魔～魔を狩る者～

もも太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪風の使い魔／魔を狩る者

【Nコード】

N2947I

【作者名】

もも太郎

【あらすじ】

三人の魔術師によって外宇宙の神々との戦いが終結を迎えた2016年。

そこから二年の月日が流れた2018年、青年『凜』は大英図書館後にて最後の魔導書を見つけ転移魔法で帰ろうとしたところ気づいたら落下していた。

落ちたそこは異世界『ハルケギニア』の『トリステイン魔法学院』。

『雪風』と呼ばれる『タバサ』に使い魔として召喚される。

無口な少女と普通の魔術師の青年の物語。

エピソードブリッジ（前書き）

この小説は『ゼロの使い魔』の二次創作です。

- ・私的な解釈
- ・自己設定
- ・オリジナル要素

などを含みますので御容赦下さい

エピソードブリッジ

凜「んにゃ・・・ひどいなこりゃ」

其処はもとも国立大英図書館が立っていた場所。

今となってはただの瓦礫の山だが。俺はそこであるものを探していた。

国立大英図書館は世界中の書物、文献の他に一般には知られていない魔導書が保管されている。

そして俺が探している魔導書は『エノクの書』そのオリジナルが此処にある。

凜「ん？・・・あった！」

探し始めてから約一時間、目的の物を発見した。

それは、紺色をベースとし角には金の装飾あしらった大きな古びた本。

タイトルにはアラブ語で『エノクの書』。

凜「間違いなくオリジナルだ！これで魔導書集めも終了、帰って祝杯でも挙げるかな♪」

そう言って空間に穴を開け、其処に魔導書を放り込み瓦礫の山を降りた。

元は駐車場だったところに降り立ち、そこで足踏みの一つ。

トンツという音と共に直径1m程の魔方陣が展開する。

凜「・・・座標認識・・・固定」

そして、魔方陣を発動させると頭から青い粒子となって消える。体が消えると魔方陣も音もなく消えた。

俺が消えた後には夕日に照らされ真っ赤に染まった瓦礫の山があるだけだった。

二年前、外宇宙の神々によって世界は崩壊へと歩んだ。

それを止めたのが三人の人間、三人は古の魔導書を所持し魔術を操り神々を駆逐していった。

一人は憎悪をもって、一人は因縁に縛られて、一人は信愛を携えて二人の友人を失いながらも神々の因果を断ち切った。その最後の一人が俺。

この戦いの大元は邪教徒が魔導書を使い神々を顕現化させ暴走させたのが始まり。

だから戦いの後、俺は世界中にあるオリジナルの魔導書を集めて回った。

二度と人の手に触れないようにと、それも今日で終わり。

・・・することが無くなってしまった。

退屈な日々が始まるのかと思っていると体が具現化する。

・・・が、目の前は青く澄みわたった空とかすかな浮遊感。

そして、落下。

凜「・・・え？」

1 使い魔は竜と平民？

此処は、『トリステイン王国』にある『トリステイン魔法学院』。其処では春の使い魔召喚の儀式が執り行われていた。

火のメイジである『キュルケ』はサラマンダーの『フレイム』を。

何一つ系統魔法が使えない『ゼロのルイズ』は、異世界の人間『平賀 才人』を。

そして、学院内ではエリートであり齢15才にしながらも

『シェヴァリエ』の称号を持つ蒼髪蒼眼の小柄な少女『タバサ』は一体どんな使い魔を召喚するのか？

生「平民なんか連れてくるなよ！ルイズ！」

キ「貴女にはお似合いの使い魔ね、『ゼロのルイズ』？」
ル「うるさいっ！」

平民を召喚したルイズを茶化すキュルケたち。
怒鳴りながらも反論しきれないルイズ。

？「お静かに！・・・コホン、ミス・ヴァリエールで最後かな？」

生徒のを静めたのは頭がどうしようもなく寂しいコルベール先生だった。

そう言ったコルベールは生徒の中から歩いてくるタバサを見た。

コ「そう言えばまだでしたね、ミス・タバサ」
タ「コクン」

キ「タバサならドラゴンとか呼べるかもね。何処かの誰かさんと違ってねえ？」

ル「ふんっ！」

そんな二人を他所に円陣の真ん中へと歩き始める。

タバサは足を止め杖を掲げ詠唱を始める。

タ「・・・・」

タバサの前に魔方陣が展開し青く光りを放つ、

タバサが詠唱を終えると魔方陣は光りを強くし空まで伸びた。

周りの誰もが呆気にとられる。

光りが収まると其処には・・・

生徒「・・・・ウインド・ドラゴンだ！」

キ「スゴイ・・・・」

姿を現したのは大きさは6メートル程の竜だった。

風竜を見た周りの生徒たちは騒いでいた。

コ「では契約を・・・」

タ「コクン」

タバサが契約の為近寄るがウインド・ドラゴンは何故か空を見上げていた。

タ「・・・・？」

タバサも気になったのか空を見上げた。

それに習って皆も上を見た。

空には・・・

凜「・・・あああああああ！！」

空から人が降ってきていた、人は遠くて認識できない距離ではなく
姿形がハッキリ分かるほど“近かった”。

コ「・・・・・・・・はっ！」

タ「・・・・・・・・！！」

コルベールとタバサが一番早く正気に戻るが、
コルベールは今、杖を手にしておらず間に合うはずなく、
タバサも杖は持っているけど詠唱している暇がなかった。
そして、人は・・・

凜「ああああ「パクンッ」・・・」

タ「・・・あ」

二人は間に合わないと思ったら、まさかの出来事だった。
振ってきた人をウインド・ドラゴンが口でキャッチした。
誰もが予想しなかった結末だったので更に呆気にと取られていた。

凜「・・・助かったよ」

ウ「キュイ♪」

凜「取りあえず降ろしてくれ」

ウ「キュイ、キュイ」

凜「はい、ありがとう」

周りを置き去りにし一人と一匹は話を進めていた。
トンッその場に降り立つ青年。

青年は栗色の髪に、深く暗い灼眼、スラッとした躯体。
この世界では余りにも“異形”。

辺りを見回すととても怪訝そうな顔をしていた。

凜「此处・・・何処？」

タ「・・・『トリステイン魔法学院』」

凜「んにゃ？」

凜の誰に言ったでもない疑問は、目の前のいたタバサが答えた。

凜「トリ・・・ステイン魔法学院？」

タ「そう、貴方は私の使い魔」

凜「使い魔って・・・普通、『このコ』みたいなのを言うんじゃないの？」

そう言って凜は自分の後ろにいる風竜の首の辺りを軽くポンポンと叩く。

ウ「キュイ♪キュイ♪」

タ「このコもそう」

うれしそうな風竜と問いに答えるタバサ。

凜「あー・・・てことは、二重契約？」

タ「たぶん」

凜「はぁ・・・えーと、其処の人」

ため息を吐いた凜は辺りを見回しコルベールを呼んだ。

コ「・・・え?! あ、私ですか?」

今まで呆けていたコルベールは凜の言葉で我に変える。

凜「そっ、此処ではこんなことよくあるの?」

コ「い、いえ・・・人が使い魔として召喚される事は無いですし、二重契約なんて尚更で・・・」

凜「そうか・・・【俺が座標を間違えたか? いや、運悪く異世界の
召喚軸に乗っちゃってしまったのか?】」

凜が考え事しているとタバサが凜の袖を数回引っ張っている。

凜「ん、何?」

タ「しゃがんで・・・」

考え事をしながらもタバサに言われたとおりその場に凜がしゃがむと。

タ「・・・五つの力を・・・私の使い魔となせ」

タバサは小さく本当に小さく詠唱をしていた。

ところどころ聞こえる詩を聞きながら凜は。

凜「・・・【あ、俺の意思なし?】待てい!」

凜はこの後何をするのか分かっていながらも詠唱を終え顔を近づけるタバサの頭に軽くチョップを入れる。

タ「いた・・・」

ウ「キュイ?!」

凜の行動にその場にいる全員が驚きの声を上げた。

それもそのはず、この世界では貴族に対し平民が手を上げることは敵わず。

更には自分が呼んだ使い魔にチョップを入れられているのだから。

それには、凜の後ろの風竜も声を上げて驚いた。

ル「ちょっと! あんた、何やってんのよ?!」

突然、大声を上げてルイズがやってきた。

ル「あんたね、平民の分際で貴族に手を上げるなんてどういうつもり?!」

凜「貴族って・・・【この世界は階級制度があるのか】」

ル「この娘だって貴族なのよ!」

凜「そうなんだ」

タ「コクン」

凜「・・・だからっていきなり召喚されて、はい契約ってされてもこっちとしては困るんだが」

ル「使い魔として召喚されたのよ、大人しく主人に従ってればいいのよ!」

凜「人権無視か・・・」

ル「使い魔風情に人権なんか無いわ!」

凜「・・・腐ってる」

ル「なんですってえ?!」

凜の言葉に気分を害したルイズは杖を持って振り上げている。それを見たキュルケが止めに入った。

キ「ちよつと!やめなさい、ルイズ?!」

キュルケは駆け寄ってきてルイズを羽交い絞めにして止めた。

ル「放しなさい、キュルケ!このクソ生意気な使い魔なんか!」
「!」

キ「今はタバサの儀式の途中なのよ!ケンカなら後にしなさい!」
ル「ケンカなんかじゃないわよ!・・・!!!!!!?!!」

じたばたとキュルケの中で暴れながらズルズルと引きずられ凜たちから遠ざけられていった。

凜「はぁ・・・やつと静かになった・・・コラッ!」

タ「・・・・」

面倒なので他に気を取られている間に契約を済ましてしまおうとしたタバサだが、

見つかって顔を凜につかまれた。

凜「何をしようとしやがる、ちみっ娘!」

タ「・・・ちみっ娘じゃない、・・・タバサ」

凜「よし、じゃあタバサ。契約する前に俺の質問に答えてほしい」

タ「何?」

凜「此処の大陸名は?」

タ「ハルケギニア」

凜「ハルケギニア?聞いたこと無いな・・・」

タ「?・・・放して」

凜「ん、お悪いな。あ、ちなみに俺は凜っていうの」

タ「凜・・・【綺麗な名前】」

凜から離れたタバサは杖を持っていないほうで捕まれた顔を撫でていた。

ほんの少し頬に赤みを帯びながら。

タ「・・・契約」

凜「んゝそうだなあ【まあ、戻っても特にやることはないし、写本の作成はここでも出来るだろう。

彼女、力は強くは無いから下手な制約は付かないだろう、問題は衣食住だが使い魔となれば解決するか？】

・・・うん、いいよ契約しよう♪」

タ「コクン」

凜の答えにタバサは頷くと、再度詠唱をし凜に口づけをする。

凜「・・・【やっぱ、契約ってこうだよなゝ】」

凜は慣れているといった感じで特に慌てる素振りも見せなかった。しばらくしてタバサが唇を離す、やはり少し頬が赤かった。

凜「ふう・・・熱っ?!」

突然、凜は首に熱さと痛みを感じたが驚いただけなので冷静に対処していた。

何処かの人は痛みで気絶したが、まあその辺は生きてきた環境の違いだろう。

タ「大丈夫、使い魔のルーンが刻まれてるだけだから」

凜「使い魔のルーン？」

訝しんでいる凜のところにコルベールが寄ってくる。

コ「ふむ、これはまた珍しいルーンですね。記録したいのでスケッチさせて頂いてもいいですか？」

凜「どうぞ・・・」

コ「ありがとうございます。ミス・タバサ貴女は引き続き儀式を」
タ「コクン」

コルベールは凜の首のルーンをまじまじと見てスケッチし、
タバサは風竜との契約を行っていた。

凜「なあ、ルーンと言っていたが単体記号か？」

コ「いえ、ルーンを組み合わせた文字ですよ。終わりました」

凜「ん、見せてもらえないか？なんて書いてあるか知りたいんだ」
コ「ええ、いいですよ」

はい、と言ってコルベールは先ほどスケッチした紙を凜に渡した。

凜「どうも・・・ん？」

タ「・・・どうしたの？」

契約を終え此方に振り向いたのはタバサ。
訝しげな声を上げた凜が気になった。

凜「いや・・・ヴィ・・・ト？『賢者』、か【この配列はゲルマンか？】」

タ「読めるの？」

凜「ん？まあ少しだけだな」

コ「ほお・・・これは賢者という意味なのですか？」

風竜のルーンをスケッチし終わったコルベールが話しに入ってきて

いた。

凜「なのですか？って此処の文字はルーンじゃないのか？」

コ「いえ、一般の文字は違いますよ。魔法の詠唱か、このような形でしか使われませんから

私たちの世界では当たり前のはずですが・・・」

凜「そうか・・・はい、返すよ。どうもね」

コ「あ、いえいえ。此方も助かりました・・・ついでは何ですが、此方も読めますかな？」

そう言ってコルベールはもう一枚のスケッチした紙を凜へと渡す。それは先ほどルイズの使い魔、才人の左手に現れたルーンのスケッチ。

凜「んー・・・ガン・ダー・ルヴ『魔法の心得のある小人』」

タ「?!」

コ「なんと?!・・・そうですか」

コルベールは凜に返してもらった紙を見てぶつぶつと呟いていた。タバサは表情こそ変わっていないが内心では凜のことを不思議に思っていた。

自分たちですら使い魔のルーンは本で調べないと分からないのになぜ、彼はルーンが読める上に意味も分かるんだろう、と。

タバサは滅多に人に興味を示さないが凜のことはとても気になっていた。

コ「ん？おっともうこんな時間ですね。では、皆さん今日の授業を終わりにします！」

後は消灯時間まで各自、自分の使い魔と親睦を深めてください！解散！」

生「「はい！」」

コルベールの言葉と共に広場にいた生徒たちは散っていった。
そしてその場に残っているのは、タバサ、凜、風竜、キュルケ、フ
レイム、
ルイズに今だ気絶しているサイトのみだった。
ルイズたちのほうを一瞥して凜に視線を向けるタバサ。

タ「・・・ついてきて」

一言告げ扉へと歩いていく。

タバサの短い言葉に困惑しながらも慌ててついていった凜。
建物に入る時にシルフィードと別れ今はタバサの部屋の前。

タ「・・・入って」

凜「あ、うん」

タバサに促され部屋に入る凜、その部屋は年頃の女の子にしては余
りにも質素だった。

部屋は、それなりに広いが窓際にベッドが一つ。ベッドの隣に一際
大きい本棚。

その反対にクローゼットが一つ。ほぼ部屋の中央に2脚対の簡易テ
ーブルがあるだけ。

凜「んーなんとまあ・・・」

タ「？」

凜はタバサの部屋を見て苦笑いをしながら頬を掻いていた。
何か可笑しなところがあるのかと首をかしげ凜を見上げる。

凜は視線を部屋に向けたままでタバサの視線には気づいてはいない。

タ「・・・適当に座って」
凜「ん」

タバサはベッドに向かい腰を下ろす。

凜はベッドに近いテーブルの椅子を引き其処に座る。

凜が椅子に座るのをジーと観察し、座った後も目を逸らさない。

タ「・・・」

凜「・・・？」

タ「・・・」

凜「・・・あの・・・」

タ「・・・」

凜「ーっ！！あー！なんか喋れー！！」

タ「?!」

凜の突然の大声にタバサは体をビクンツと震わせ反応する。

そんなタバサをじと目で見続ける凜。

いつも冷静なタバサも吃驚したらしく心臓がすばやく脈打っていた。

凜「・・・で」

タ「すー、はー・・・？」

凜「この世界については全くと言っていいほど知らないんだけど」

タ「・・・？」

タバサは何故といった表情だったが取りあえず凜にハルケギニアについて説明していく。

政治、魔法、学院、経済、歴史タバサが説明し事あるごとに凜からはいくつもの質問が沸いてきた。

タバサとしては過去にこれほどまで喋ったことは有っただろうか

いうくらい喋っていた。

タ「・・・もう、いい？」

凜「ん、ありがと」

タ「・・・読める？」

凜「本？ああ文字か」

タ「コクン」

一通りの説明が終わったタバサは今度は自分が聞く番だと然も言いたげに凜に一冊の本を渡す。

渡したのは自分のお気に入り『イーヴァルディの勇者』であった。この本は子供向けの童話、難しい文法は無いので幾らか読めるのではないかと踏んだタバサだが。

凜「うん、無理♪」

凜の爽快なまでの返答に流石のタバサも表情を崩さずにはいられなかった。

タ「・・・読めるんじゃないの？」

凜「んにゃ、字体は見た事あるけど文法が全然違うから読めない」

タ「でもルーンは読んだ」

凜「ルーンはね、俺の世界と読み方が一緒だったから読めただけ」

タ「私たちは読めない」

凜「あーそんなこと言ってたねえ」

タ「・・・貴方は何処から来たの？」

凜「んー言っても信じないだろうけど、イギリスってとこなんだけど・・・」

【文化レベル的には中世ヨーロッパな感じなんだけどな】
タ「イギリス？どこ？」

凜「何処と言われてもね・・・ん？」

コツン、コツン。

凜がタバサにどう答えようか悩んでいるとき部屋の窓を叩く音がした。

凜は目の前だったので直ぐ気づき、タバサは窓へと振り返った。

タ「・・・シルフィード」

凜「・・・かまってほしいんじゃない？」

シ「キュイ♪キュイ♪」

タ「・・・はあ」

半ば何かを諦めたようにため息を吐くタバサ。

そして、二人は部屋を出てシルフィードのいる外へと向かう。

女子宿舎の影にある日陰、其処にタバサ、凜、シルフィードはいた。凜にいたっては其処に着いてからシルフィードを眺めたままである。

凜「・・・」

タ「・・・」

シ「キュイ♪」

眺めたまま動かない凜。

シルフィードの横に立ち背中を撫でているタバサ。

タバサに撫でられ嬉しそうに鳴くシルフィード。

ふと、凜が・・・

凜「へー多少なりとも違うんだな、風“韻”竜って」

タ「?!」

シ「キュイ?!」

なぜ？と言った表情を凜に向けるタバサとシルフィード。

だが凜は二人の反応を気にせずに辺りをキョロキョロしシルフィードに向き直る。

凜「喋ってみてよ、シルフィード♪」

シ「キュイ〜・・・なんで知ってますの？」

タ「馬鹿」

ゴンツとタバサがシルフィードの頭を身の丈を超える杖で殴った。

シ「痛いのですの〜！それに凜さんを隠し通せる訳ありませんの〜！」

タ「違う」

また、ゴンツ、ゴンツとタバサはシルフィードの頭を杖で殴る。

シ「痛あ！痛あいい！」

凜「まあまあタバサ、人なら周りにいないからそんなに何度も叩かない」

タ「・・・・」

凜はタバサの危惧していることを察してシルフィードに助け舟を出した。

まあ、それならと再度殴ろうとしていた杖を下ろした。

タ「でも、なんで？」

凜「気づいたのは建物に入る前、何処となく普通の竜とは違うな〜とね。

内包している魔力も幼年期の竜にしては多すぎる、ただの竜なら精々三分の一と言ったところ。

それに竜は知識は高いが幼年期では普通人語は理解できない、
なのにシルフィードはタバサの言葉をハッキリと理解していたから
ね」

シ「凄いですの〜♪キュイ、キュイ〜♪」

タ「・・・何者？」

凜「何者といわれてもねえ、人間としか答えられない」
タ「・・・」

凜の答えに納得しないタバサは凜に近づき杖を振るう。

凜「ん？・・・ディテクト？」

タ「?!」

凜「なんか分かった？」

タバサは凜にかけた魔法を当てられて内心驚いている。
ましてやその効果さえ当ててしまう彼は本当に何者なんだと深く考
える。

というかこの人には脅かされっぱなしなタバサは自分に腹が立っ
ている。

凜「ちよっ、顔怖いですよタバサさん・・・」

シ「キュイ〜・・・お姉さま機嫌悪いですの〜・・・」

タ「うるさい」

不機嫌なままシルフィードに向き直りまた一つゴンツと叩いた。

シ「痛い〜・・・使い魔虐待ですの〜！」

タ「うるさ・・・？」

再度杖を持ち上げシルフィードを叩こうとしたタバサだが、

振り下ろそうとしても杖が降りないことに気づき首だけ振り返る。

凜「こら！機嫌悪いからって八つ当たりするな・・・」

タ「・・・・」

凜「・・・シルフィードに謝るんだ」

そう言ったとたん杖から力が抜けたのが分かると凜は杖から手を放した。

タバサは杖を下ろしシルフィードに近づき叩いた場所を撫でながら。

タ「・・・・ごめん」

シ「キュイ〜お姉さまだから許すのですの〜♪」

許したシルフィードも気持ちよさそうな声を出していた。

凜「ふう・・・話してあげる、なぜ俺が魔法などが分かるのか」

タ「コクン」

それから二人でシルフィードに寄りかかるように座り、凜が此処に呼ばれるまで何をしていて

何と戦っていたことを話した。

ドラゴンに追っ駆け回されたこと、ハスターの領地であるセラエノへ行ったこと、

時空を超えたこと、外宇宙の神に友と戦ったこと、戦いの後で魔導書を探し回ったこと。

もちろん凜は自分が魔術を使えることを伏せて。

大き過ぎる力は争いを呼び、悲劇を生む。凜の現人神としての力は余りにも強大で凶悪なのだから。

六千年経ってなおこの程度の魔法しか発展していないハルケギニア

にとっては未知の力。
人が踏み込んではいけない領域。

凜「……と、いう訳なんだが……どうした？」

タ「……………」

シ「……………」

余りにも途方もない夢物語を聞かせられているようで、でも話し方に現実味がありすぎる凜の話。

人は自分の知らない事、信じない事は絵空事のように感じてしまう。
タバサとシルフィードもまた然り。

シ「……信じられないですの……………」

タ「コクン……………」

凜「信じられないと言われてもしょうがないことは分かっているよ、でも事実」

今だ半信半疑の二人ではあるが、この経験があるから凜が魔術に精通していると言うのも頷けてしまう二人だった。

凜「まあ無理に理解しなくてもいいさ、長い付き合いになるだろうからいづれ分かるさ」

タ「……………」

シ「キュイ〜やっぱりお兄様は只者じゃなかったですの……………」

凜「ありがと……………」

タ「……………」

凜、タ「お兄様？」

シ「はいですの……………」凜さんを今度からお兄様と呼びしますの……………」
「キュイ……………」

凜「……………」ま、好きにどうぞ」

シ「やったですの〜シルフィ一度にお姉様とお兄様が出来てとても嬉しいですの〜♪キュイ〜♪」

とても嬉しそうにシルフィードは鳴き声をあげた。

微笑みながらシルフィードを見つめる凧と、表情こそ崩してはいないが普段よりかは穏やかなタバサ。

そんな時も束の間、辺りはもう黄昏に色を染めていた。

凧「ん?・・・もう、こんな時間かそろそろ部屋に戻ろうかタバサ」

タ「コクン」

凧「じゃあまた明日なシルフィード」

シ「はいですの〜」

凧とタバサはシルフィードと別れタバサの自室へと戻っていった。そんな二人の背中を建物に消えるまで見つめていたシルフィードがいた。

シ「・・・イルククウはとてもいい人たちとめぐり合えたの、だから心配しないでほしいですの」

シルフィードは天を仰いで一人呟いた。

タバサは自室に戻るとフラフラと歩きベッドに倒れた。

凧「おいおい、大丈夫か?」

タ「大丈夫、召喚で疲れただけ」

上半身さえ起こさずベッドの上を這うようにして枕まで動くタバサ。凧それを苦笑いで見つめていた。

凜「寝るのはいいが服くらい着替えろよ」
タ「コクン」

凜の言葉にタバサは枕に顔を埋めたまま頷いた。
少し間をおいてタバサは起き上がるとベッドの上で、マント、ブラウスと脱ぎ始めた。

凜「?!・・・はあ」

凜はタバサの行動に驚きつつも自主的に後ろを向いた。

タ「？」

タバサの視線を凜は背中では受け取ると。

凜「・・・少しは恥じらいくらい持ちなよ」

タ「?・・・あ」

凜の言葉の意味を少し理解できなかったタバサだが自分の恰好を見て気がつくとは頬を赤く染めた。

が、凜は背を向けている為気づくことはない。

自分のことに恥じらいを覚えつつも寝巻きに着替え終わるタバサ。

タ「・・・もういい」

凜「ふう・・・ん、随分と可愛いじゃないか」

タバサの恰好は髪と瞳と同じ薄い青色の基本的なパジャマだが、凜が可愛いと指摘した大部分はタバサの体よりパジャマが幾分大きいことだった。

袖と裾は指先がチョンと出ているだけ、上着だけでワンピースになるんじゃないかと思う丈の長さ。

タ「……………」

タバサは顔が赤くなるのを見られる前にそそくさとベッドにもぐってしまった。

内心かわいい主だ、と思いながらタバサを見て微笑んでいた。

ふとタバサが何かを思い出したかのように上半身をゆっくりと起こす。

凜「どうした？」

タ「寝る場所」

凜「ああ、かけるものを貸してくれば床でも……………」

タ「ダメ、ここ」

凜の言葉をタバサは途中で断ち自分の隣をポンポンと叩く。

凜「タバサ…………俺は男だよ？」

タ「かまわない、床はダメ」

凜の寝る所は此処だと言わんばかりにタバサは凜を見つめる。

どう反論しようか考えていた凜だがタバサの目に折れた。

凜「…………強情な奴め」はあ…………分かったよ、だから先に寝な。

俺はもう少し起きているから」

タ「…………わかった」

凜の言葉に安心したのか力なくポテッとベッドに倒れたタバサ。

最初はモゾモゾとしていたが、数分後タバサの規則正しい寝息が聞

こえてきた。

それを確認した凜はランプの火を消しベッドから一番遠い窓を開け二つの月を見ていた。

凜「ふう・・・本当に来ちまったんだな異世界。月が二つ、まさにカルコサだな」

誰に言うでもなくボソツと一人、月に呟く凜。

こうして凜のハルケギニアでの最初の一日が終わろうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2947i/>

雪風の使い魔～魔を狩る者～

2010年10月10日05時30分発行